

(3) 市民活動・NPO部会

「地域福祉計画」は、“誰のためにつくられますか？” “計画を進めるのは誰ですか？” 多くの人が疑問に感じることです。

「市民のためにつくられます」そして「進め手の中心は市民です」

「一人でも多くの市民が進め手になること」…それが、市民活動・NPO部会の視点でとらえた「地域福祉」です。



- ・地域の課題に気づくこと
- ・自身が持っている力に気づくこと
- ・力を出す場所がたくさんあることを知ること
- ・誰かのために動くこと…実は自分のため

「市民活動・NPO部会」では、「一人でも多くの市民のみなさんが『地域福祉計画』の進め手になる仕組みづくり」を話し合いました。

これからの仕組みを考えるには、まず今（現状）を知ることが必要です。はじめに、部会メンバーのがどのようなフィールドで活動または業務しているか、また、現状の課題はなどを共有することから始めました。



- ・半田市社会福祉協議会ボランティアセンター
- ・半田市市民活動支援センター
- ・社会教育団体やゲストティーチャー制度を主管する生涯学習課
- ・シルバー人材センター
- ・日本福祉大学の生涯学習センター
- ・健康増進を進める保健センター
- ・女性団体・ボランティア団体のネットワーク組織

それぞれの役割は？



活動へのコーディネート・人材の育成機能は数多くありますが、「具体的には何をしているの？」「よく似たことをしている」「連携できそうがありそう」など「気づきと発見（再確認）」と「？（疑問あるいは驚き）」からのスタートでした。その後グループワークを重ね、部会のキーワードが「情報」と「つなぎ役の人」であることが浮き彫りとなりました。

情報は溢れていますが、一元化・集約・共有・適時適切な発信はまだまだされていないようです。この仕組みづくりが第一ということになりました。

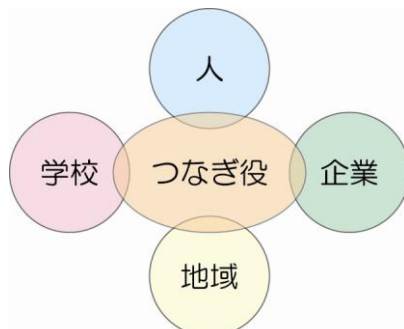
発信されている情報としては…

グループ、団体、NPO法人の活動内容
講座、イベント
センターの機能、登録制度の機能 など

具体的には、現在、市民活動支援センターと社会福祉協議会ボランティアセンターの一元化の検討が

進んでいます。新たにできるセンターを市民活動・NPOの情報の中核とし、**情報の集約システムを導入**する必要があります。

集約された情報は、その内容により、発信すべきエリア・対象・手法の検討がなされ、効果的な発信が行われることが求められます。現在、紙ベースの発信は、市報もしくは市報への折り込みが中心ですが、フリーペーパー、対象にスポットを当てた手作りポスターなど、柔軟な考え方を望む声が多く出されました。



そして、その情報を活用し、「人と人」「人と地域」「人と企業や学校」をつなぐ**「つなぎ役の人」の存在**が不足していることも挙げられました。

「つなぎ役の人」のイメージは、

- ◆ 迷惑にならないけど、おせっかいな人
…引っぱりたり、押しついたりがないと
一歩が踏み出せないの
- ◆ 地域に拠点があり、常駐していること
…小学校区あるいは公民館に1~2人
- ◆ 活動の対価が保証されている



…対価が支払われ、継続していく仕組みがあること

スキルアップの機会、情報交換の場づくりが行われ、孤立しないことなどがあげられ、「MOP（モップ）」…M:迷惑でない O:おせっかいな P:人（Person）「コンシエルジェ」「世話ずきん」など、オリジナルな名前の提案もありました。

コーディネートの重要性、コーディネーターの必要性は、今までも言われてきましたが、市民のみなさんの大半は、「コーディネート?」「コーディネーターは何をする人?」と思っているのではないのでしょうか。地域福祉を進めるための役割・機能を具現化するには時間がかかりますが、「地域をつなぐ〇〇な人」の育成・配置・継続するシステムづくりが必須です。システムを具体的に考える組織として、地域福祉計画の各作業部会が今後も連携を取っていくことが求められます。

「一人でも多くの市民が地域福祉の進め手になる」には、

- ◆ 情報の核となるセンターと、地域の拠点がハブ状につながる
- ◆ 地域の拠点には、情報を活用するつなぎ手がいる

が、必要です。

「福祉の枠組みを超えること、気付いたら一歩を踏み出す市民になること」

公募の市民・活動実践者・大学職員・福祉関係職員・教育委員会・行政・社協、それが私たち市民活動・NPO部会構成メンバーの願いです。